

習合尊としての荒神の成立

— 東京・金剛院蔵 忿怒金剛図を中心に —

上村駿介 (青山学院大学)

東京・金剛院に伝来した「忿怒金剛図」と称される画像(絹本著色、本紙 縦 92.6cm、横 36.4cm、以下、金剛院本と呼ぶ)は、画面の中央に炎髪忿怒相で八面八臂の明王形をあらわし、その右膝を大きく振り上げて丁字に立ち、両足の下には反花状の蓮華をそれぞれ配する。さらにまた、画面下方の左右には鬼神形を各 1 配している。金剛院本はその作風の検討から、鎌倉時代(13 世紀)に遡る制作と考えるよいであろう。

金剛院本に描かれた内容は他に類例が求め難いものである。そのためこれまで尊名の特定がなされてはおらず、仮に上述の名称をもって呼ばれてきた。この未詳の明王形の尊名を特定する手がかりとなるのは、一群の室町時代以降の作例である。すなわち、岡山・正楽寺蔵「荒神曼荼羅」(以下、正楽寺本)ほかの作例にあらわれた中心尊と同一の尊容とみなされる。金剛院本の明王形も荒神に比定し得るものとするのである。

これまで荒神の作例は 14 世紀の制作とされる東京国立博物館蔵「三宝荒神像」をもって現存最古と認識されてきた。しかし金剛院本は、これを遡ることになる。そして、この金剛院本の存在を見据えるとき、これまで室町時代以降の荒神図の、しかも亜流とされていた正楽寺本を含む一群の作例が、むしろ鎌倉時代(13 世紀)に遡る古い荒神の姿かたちを伝えていたことになる。

ここで改めて金剛院本を眺めてみると、正楽寺本ほかの作例には認め難い特徴も多く含んでいることに気がつく。もとより金剛院本を遡ってこのような姿の明王形の存在は確認できない。そのような目で金剛院本をみると、丁字立ちの姿は蔵王権現や五大力菩薩を髣髴とさせるものがある。ことに肉身を赤くあらわし、両足下に蓮華をあらわす点は後者との類似性が注目されよう。ただし、足下の蓮華を左右でその配色を違えることを重視するならば、そこに金剛童子のイメージ投影があったものとも思われる。加えて、それらがいずれも二臂の姿であらわされるのに対し、金剛院本では脇面と頭上面をあらわし多臂となり、その持物とともども大威徳明王のそれらに通じるものが認められることも留意したい。また、その尊前に眷属のごとく配された二体の鬼神は既知の荒神図には見いだせないものであり、その姿かたちは役行者図に描かれるところの二体の使役鬼神を想起させるであろう。

本発表では、金剛院本の様相のうちに様々な先行図像を取り込みつつ成立した荒神図としての原初性を認め、実態のよくわからない荒神信仰の黎明期にあって、この神にどのような効験を求めようとしたのかを習合をみた様々な図像表現のうちに読み取ってみたい。あわせて、荒神の成立に留まることなく、鎌倉時代以降に出現する宇賀弁才天や茶枳尼天といった新たな異形の神々の展開の中で、この金剛院本の位置づけにも及んでみたい。